

ニューズレター 目次

1	第33回セミナーのお知らせ	1
2	環境三学会合同シンポジウムのおしらせ	4
3	第32回セミナーの報告	4
4	プレ新潟セミナー研究例会の報告	6
5	研究例会(関西学院大学)の報告	8

1 第33回セミナー（新潟・阿賀野川）のお知らせ

2006年春の第33回セミナーは、阿賀野川と信濃川という2つの大河に抱かれた水の都、新潟県新潟市で開催いたします。参加申込みを受け付けますので、宜しくお願いいたします。

なお、セミナー時のベビー・シッティングは、「セミナー時におけるベビーシッターの取り扱い」（ニューズレター第38号/通算43号参照）に基づき、第32回セミナーとほぼ同じ要領で行われます。詳細情報は、参加申込者に追ってお知らせいたします。

【日時】 2006年6月23日（金）～25日（日）

【会場】 新潟県新潟市（万代シルバーホテル、新潟市万代市民会館）

【後援】 新潟県・阿賀野市、（他を予定）

【テーマ】 新潟・阿賀野川でたどる公害・環境問題の歴史と現在

【開催趣旨】

阿賀野川の上流に、明治時代、周辺地域に煙害被害を与えた草倉銅山があった。経営者は古河市兵衛。彼は草倉銅山の収益を足尾銅山の経営に注ぎ込み、再び、足尾の煙害・渡良瀬川の鉱毒問題を起こした。時代が移り、1965年、阿賀野川では新潟水俣病が発生した。新潟水俣病は1995年に政治決着を迎えたものの、被害者にとって水俣病は終わることはない。阿賀野川と信濃川、1996年にラムサール登録湿地になった佐潟や、「環境と人間のふれあい館—新潟水俣病資料館—」が立地する福島潟など、新潟は「水」に脅かされながらも、「水」に恵まれた土地である。市民主導の川づくり・まちづくりの活動も活発である。第33回セミナーでは、さまざまな影と光とが混在する新潟・阿賀野川をフィールドに、新潟水俣病を中心に据えながら公害・環境問題の歴史と現在を見つめてゆく。これまでに環境社会学が分析の俎上にあげてきた、多様な公害・環境問題や生活論的視点を横断するような論点を、いまいちど議論する契機にできれば幸いである。

【参加申込み・期限】 5月15日（月）～31日（水）

参加申し込みは Web 上で行います。次のアドレスにて本登録して下さるようお願いいたします。なお学会 Web ページのトップページからも入れます。仮登録した人も改めて本登録をお願いいたします。エクスカーションコース、ホテルの部屋割り（シングル・ツイン）の希望につきましては、申し込み順ということで仮登録の方を優先いたします。

<http://www.soc.nii.ac.jp/cgi-bin/jses3/mailpro2/index.cgi>

【参加費】 28,000円くらいを予定（全参加・宿泊代込み）

[内容(予定)]

- 6月23日(金) 15:00~17:55 自由報告
19:00~20:30 対談・坂東克彦弁護士×船橋晴俊(法政大学)
19:00~ 各種委員会
- 6月24日(土) 9:00~16:30 エクスカーション
17:00~18:00 総会
18:30~20:30 懇親会(終了後、朝まで討論会)
- 6月25日(日) 9:30~12:15 シンポジウム

[自由報告]

部会A 司会：堀川三郎(法政大学)

15:00-15:40 下田守(下関市立大学)

「カネミ油症の初期の行政対応について」

15:45-16:25 定松淳(日本学術振興会)

「ダイオキシン論争の社会的解明 その2」

16:30-17:10 角田季美枝(千葉大学大学院社会文化科学研究科都市研究専攻博士後期課程)

「流域環境保全に有用なPRTTR制度を求めて」

17:15-17:55 石坂晋哉(京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科博士課程)

「現代インドのガンディー主義と環境運動—テラー・ダム反対運動の展開にみられるガンディー主義の思想・実践—」

部会B 司会：古川彰(関西学院大学)

15:00-15:40 菅豊(東京大学東洋文化研究所)

「あらしう人びと、つながる人びと—コモンズの歴史から見たアクターの異質性が生み出す困難さと可能性—」

15:45-16:25 北島義和(京都大学大学院文学研究科社会学専修博士後期課程)

「地域社会における井戸水利用の環境史」

16:30-17:10 山下祐介(弘前大学)

「河川コントロールの確立と流域社会—青森県岩木川を事例に—」

17:15-17:55 飯塚邦彦(成蹊大学非常勤講師)

「市民主導の環境政策を実現するには—武蔵野市の事例から—」

[対談] 新潟水俣病第一次訴訟および第二次訴訟を牽引してきた坂東克彦弁護士をお迎えし、新潟水俣病の歴史と現在、そして残された課題などについてうかがう。

[エクスカーション] 新潟県・阿賀野川流域は、環境問題や環境教育を考えるうえで示唆に富んだ「資源」を有している。鉱害や公害問題の歴史や現在、まちづくりや環境再生の取り組みなど、新潟県・阿賀野川流域が発信する人と環境との関係性を、以下に予定する4コースのなかで考えてゆきたい。(現地の道路事情などにより、当初案内に変更が生じています。また、患者さんの体調などにより、コース内容に変更が生じる場合があります。)

①草倉銅山(龍蔵寺)・狐の嫁入り屋敷・津島屋(つしまや)コース(定員20名)

かつて古河市兵衛は草倉銅山で得た収益をもとに足尾銅山の経営に乗り出した。草倉銅山の煙害に際して結ばれた賠償協定は、足尾の「永久示談契約」の原型ともいわれている。龍蔵寺は、草倉銅山で働いていた鉱夫の無縁仏の墓が3百基あり、友子同盟の規模としては日本一だという。このコースでは、龍蔵寺のほか、まちづくりで有名な旧津川町の狐の嫁入り屋敷を訪ねる。また、新潟水俣病の現地踏査(阿賀野川上流地域)のほか、下流の患者多発地域である津島屋で被害者の方々との交流会を持つ。

見学・訪問予定場所：鹿瀬発電所、旧昭和電工、排水口、龍蔵寺、狐の嫁入り屋敷、津島屋

②吉田東伍・千唐仁（せんとうじ）コース（定員 20 名）

新潟水俣病の現地踏査（上流地域）を行い、阿賀野川中流域の旧安田町（現在・阿賀野市）出身の地理学者・吉田東伍の博物館を見学し、今日の河川管理の議論に通じる吉田東伍の治水について説明していただく。また、東伍の生家で新潟水俣病被害者の話を聞き、千唐仁で被害者の方々との交流会を持つ。

見学・訪問予定場所：鹿瀬発電所、旧昭和電工、排水口、吉田東伍記念博物館、千唐仁、千唐仁のお地藏さん

③豊栄（とよさか）・環境と人間のふれあい館コース（定員 20 名）

新潟水俣病の現地踏査（下流地域）を行い、豊栄の被害者の方々との交流会を持つ。環境と人間のふれあい館—新潟水俣病資料館—では、館内見学のほか、「語り部」として活動なさっている被害者の方のお話をうかがう。

* 環境社会学会セミナー開催にあわせて、環境と人間のふれあい館—新潟水俣病資料館—にて、川崎那恵「阿賀のほとりの花咲く庭で—キミイさんのときどき二人暮らし」他、新潟水俣病に関連する写真展を企画中。

見学・訪問予定場所：環境と人間のふれあい館—新潟水俣病資料館—、豊栄、横雲橋・松浜など

④新潟の水辺と市民活動コース（定員 40 名）

新潟では、水辺をめぐる市民活動が盛んである。このコースでは、阿賀野川の古道である通船川の再生や、新潟の堀割再生、市民の寄付による萬代橋の橋側灯設置などの状況を見学する。また、市民株主によるウォーターシャトルに乗船して、ラムサール登録湿地である佐潟での官民の取り組みについてお話をうかがう。

見学・訪問予定場所：栗ノ木川・沼垂（ぬつたり）小学校近くの新船着場、通船川・松崎ニュータウン公園脇・階段護岸、山ノ下閘門、早川掘・新潟市歴史博物館、信濃川ウォーターシャトル、佐潟など

[シンポジウム]

4 コースのエクスカッションで、新潟・阿賀野川流域が持つ鉱害／公害問題、まちづくりや環境自治など環境教育資源の多様性と潜在的な可能性が示されるものと考えて。シンポジウムでは、新潟県・阿賀野川流域で活動なさっている大熊孝氏、高野秀男氏、旗野秀人氏、そして学会員の宮内泰介（北海道大学）という 4 名のパネリストの方々と、新潟水俣病問題や市民参加による環境創造について考えてゆく。

現地パネリスト紹介

大熊 孝（新潟大学自然科学系・工学部建設学科・教授、新潟大学附属図書館長、工学博士）

東京大学大学院博士課程修了後、新潟大学工学部助手に着任、講師、助教授を経て現職。専門は河川工学、土木史。著書に「技術にも自治がある—治水技術の伝統と近代—」（農文協、2004）など。自然と人間の関係がどうあればいいのかを、川を通して研究している。

高野秀男（新潟県平和運動センター・新潟水俣病共闘会議事務局局長）

中小民間労組の組合運動を経て 1983 年より新潟水俣病被害者の会と同共闘会議の専従事務局。99 年 12 月より連合に引き継がない「平和・人権・環境」を運動課題とする新潟県平和運動センター（19 労組／51200 人）の事務局長に就任。共著として『阿賀よ 忘れるな』、『いつち うんめえ 水らった』、『阿賀よ 伝えて』など。

旗野秀人（株旗野住研取締役専務、新潟水俣病安田患者の会事務局、阿賀に生きるファン倶楽部事務局、冥土のみやげ企画事務局など）

1950年阿賀のほとり生まれ。71年に水俣病と出会い、本業(大工)の傍ら地元患者会の使い走り。行政不服や裁判を経験する中で、運動の限界と足元の宝もん(故郷や患者の魅力)に気づく。阿賀に生きるファン倶楽部や冥土のみやげ企画を名乗りながら文化運動を模索中。

[第33回セミナー事務局]

セミナー実行委員長：船橋晴俊

セミナー事務局：新垣たずさ、飯塚邦彦、菅豊、関礼子、堀田恭子、家中茂、山中由紀、渡辺伸一

[問合せ先]

〒867-0008 熊本県水俣市浜 4058-18 国立水俣病総合研究センター 国際・総合研究部 社会科学室
新垣たずさ

Tel:0966-63-3111 (代表) Fax:0966-61-1145 E-mail:tazusa@nimd.go.jp

〒171-8501 豊島区西池袋 3-34-1 立教大学社会学部 関礼子

Tel:03-3985-4723 E-mail:seki@rikkyo.ne.jp

(メールでの問い合わせの場合には、念のため、新垣と関のアドレスを併記してください。)

2 環境三学会合同シンポジウム2006のおしらせ

「環境三学会合同シンポジウム2006」を、来る6月11日[日]に明治学院大学白金キャンパスにて、以下のプログラムで行いますので、お知らせいたします。ふるってご参加くださいますようお願いいたします。詳細につきましては、後日、メルマガにて改めてお知らせいたします。

環境社会学会研究活動委員会

[日時] 2006年6月11日(日) 13:30~17:30

[会場] 明治学院大学白金キャンパス

[主催] 環境社会学会、環境経済・政策学会、環境法政策学会

[テーマ] 「コモンズの現代的意義」

[参加費] 1000円(資料代)

シンポジウムのプログラム(案)

第1部 報告 13:30~15:00

基調報告：未定

報告：環境法の視点から

『「コモンズ」としての国立公園(自然公園/自然地域)の管理』加藤峰夫(横浜国立大学)

環境経済学の視点から 交渉中

環境社会学の視点から 交渉中

第2部 パネルディスカッション 15:30~17:30

コーディネータ 脇田健一(社・龍谷大学)

加藤峰夫(法・横浜国立大学)他

(敬称略 社=環境社会学会、経=環境経済・政策学会、法=環境法政策学会を示す)

問い合わせ先：下記事務局宛に、メールでお問い合わせください。

明治学院大学 藤川賢研究室(環境社会学会) E-mail: fujikawa@soc.meijigakuin.ac.jp

3 プレ新潟セミナー研究例会(関東地区)の報告

[事務局から] 関東地区研究例会が2006年3月11日(土)13時30分から16時30分まで、約40名の参加のもと、法政大学大学院棟401室にて開催されました。第33回新潟セミナーの布石として、

12月の関西地区でのプレセミナーに引き続いた企画でした。関西でのテーマは「水俣病問題の現在を知る」でしたが、関東では「新潟水俣病『阿賀ルネッサンス』への潮流」がテーマとなりました。新潟水俣病被害者家族でもあり、現在はがん患者会の活動をしておられる五十嵐昭子さんと、長年にわたって地元で患者さんたちと深く関わってこられた旗野秀人さんをおむかえし、報告・対談・総合討論という形をとりました（参考：<http://suga.asablo.jp/blog/2006/03/11/286032>）。内容は以下のとおりです。

- ・総合司会：関礼子(立教大学)
- ・立石裕二(東京大学大学院)「公害問題研究における科学社会的アプローチの重要性」
- ・五十嵐昭子さん(がん患者セルフヘルプグループ・支えあう会「α」副代表・「α」通信編集長)「水俣病の闘いとがん患者会活動」
- ・旗野秀人さん(冥土のみやげ企画社(安田患者の会事務局))「溢れるほどの冥土のみやげを」
- ・旗野秀人さん×菅豊(東京大学東洋文化研究所)「川に生かされた日々運動ではない形での「運動」のみちすじ」

今回は学会員以外の参加もありました。決して長くはない時間の中で、印象に残った話を2つほど、記します。五十嵐昭子さんは、水俣病問題に対して「闘い」という視点から関わってきたけれど、「α」では世話人として活動しています。そのお話で、がん患者の「はげましを求めているが、それは『がんばれ』ではなくて、同じ病気の人ががんばって生きている姿がはげましなのです」という言葉から、「はげましとは生きているその人の価値を認めること、死を意識しながら、真摯に生きる会員(がん患者)の姿に世話人もまた励まされている」とお話したことが1つ目。2つ目は「基本的には自分のまちな人とのつきあいでせいっぱい」という旗野秀人さんが、行政不服訴訟、民事訴訟等の運動から映画撮影やお地蔵様づくりなどの「運動」を経験してきて「いろいろやったけど、自分が解放されること、自分がたのしくなければいけない」と語り、今も月に一度、患者さんとの集まりを続けている話でした。「日常」「地域」「文化」「運動」「継続」などが本セミナーにつながるキーワードになっていくのかとふと思いました。

今回、開催にあたって、法政大学大学院の大門信也、大倉季久、森久聡、吉田暁子諸氏のご協力が得られましたことに感謝いたします。なお会員から場所の説明が不親切だという指摘がありました。あまりにもおおまかなHPのアドレスを掲載いたしましたことを、深くお詫び申し上げます。

(文責:堀田恭子)

「新潟水俣病『阿賀ルネッサンス』への潮流」に参加して

大門信也(法政大学大学院)

去る3月11日、6月の新潟水俣病セミナーのプレ企画として、関東地区研究例会が行われた。参加者の立場から、ごく簡単にではあるが内容の報告と若干の感想を述べさせていただきます。

今回、新潟水俣病問題と新潟県安田町(現阿賀野市)に縁の深いお二人のお話を伺えたことは、まずもって何よりの幸運だったと思う。五十嵐昭子さんは、水俣病の運動とがん患者のセルフヘルプグループでの活動のご経験から、水俣病の運動は患者の「人間としての尊厳を復権させる闘い」だったこと、その後のがん患者のグループでの取り組みのなかで、生きる価値を認め合うという意味での「はげまし」の大切さを感じていること、そしてそのような「はげまし」は、一見がん患者グループの活動と大きく異なる水俣病の闘いにも相通じることなど、とても大切でまた興味深い論点を提起してくださった。旗野秀人さんは、川本輝夫さんとの出会いから、近年取り組まれている「冥土のみやげツアー」まで、ご自身と水俣病との関わりの足取りをたどりながら、それぞれの取り組みや患者さん一人ひとりへの想いをきかせてくださった。氏のお話しの端々からほとぼる「溢れるほど

の」ユーモアは、まさにあの映画『阿賀に生きる』——ご自身はこの映画を新潟の「宝もん」だという——を包む雰囲気そのものだったと思う。つづいて菅豊さんは、旗野さんとの対談を通じて、民俗学の立場から、人々の「日常の想い」をいかにして運動にとりこんでいけるか、という問いを提起された。菅さんのこの「日常性」への問いは、運動のなかで患者さんたちにどこかいつも「患者らしさ」を強いてしまっていたのではないかと、とふり返られた旗野さんの想い、また水俣病患者とがん患者の取り組みを、「はげまし」というひとつの言葉・地平で捉えようとされている五十嵐さんの想いと、深く響きあうものに感じられた。阿賀野川流域でいわれなき被害や差別を受けてきた未認定患者の方々のことを想うとき、「科学」的に成型される「病像＝表象」に押し込めてしまうことの恐ろしさ、「あたりまえの日常が破壊されたこと」に寄りそって考えることの大切さを、誰もが感じないではいられないだろう。

さて、例会から何日間か経た今、私は、「日常の大切さ」と同時に「日常からはみでる大切ななにか」についても思いを馳せるようになっていく。なぜ我々は「水俣病」「未認定患者」の問題を忘れてはいけない（と考える）のだろうか。「政治的解決」以降も裁判を続け、最高裁で勝訴を勝ち取った関西訴訟原告の方々の現在の状況と想いを、我々はどうのように理解できるだろうか。そこには、日常が大切であればこそ、日常とは別次元の大切ななにかがあるように思われてならない。『阿賀に生きる』というこの上なく魅力的な映画が、「悲惨」というイメージの裏に押し込められてしまいがちな患者の方々の日常を、静かにまた豊かに映し出しながら、それでもなお観るものに未認定患者問題の「酷さ」やその「不正義」を訴えかけてくる——と私は感じるのだが——のはなぜだろうか。この映画が日常を丹念にまた豊かに描き出しているからこそ、深く訴えるものがあるというのはひとつの事実であろう。しかしそれとは逆さまに、深く訴えかけるなにかがあればこそ、映し出される日常（の生）に深い感銘を受けるのもまた事実とはいえないだろうか。今私が考えているのは、もしかしたらその「なにか」とは、例えば企業や国に「責任」を問い応答を求める姿勢、またそうした姿勢を忘れてはならないという人々の想いなのではないか、ということだ。こうした姿勢は、どこか日常からはみでてしまうような契機をはらんだものであるように私には思える。このような考えが果たして適切かどうか、自信はないのだが、ぜひ6月の阿賀野川に確かめにいきたいと思う。

（順序が逆になってしまったが）第1報告者の立石裕二さんは、公害・環境問題における科学社会的アプローチの重要性を指摘、とりわけ行政や市民から科学者へなされる「科学委託」に着目し、その類型論的な分析を提示された。他の報告との違いもあつてか、立石さんの学究志向の強いご報告は必ずしもフロアに響かなかった部分もあったように思われた。しかし、公害・環境問題における科学・科学者の働きを分析し評価するという課題は、実は十分に掘り下げられてきたとは言いがたく、今後ますますの成果が期待される。公害・環境問題においては科学者も（もちろん社会学者も）また、重く切迫した「責任」をめぐる問いと応答の営みの渦中にある。上述の論点にも関わるが、このことをどれだけ自らの問題設定や分析枠組みのなかに息づかせることができるか、これが今後の「環境問題の科学社会学」の鍵になるように感じられた。

最後になったが、魅力的なお話しをしていただいた登壇者の皆さま、企画と準備をしていただいた事務局の皆さまに感謝したい。どうもありがとうございました。

4 公募情報

< 1 > 大妻女子大学

1. 機関名：大妻女子大学
2. 部署名：人間関係学部
3. 職名： 助教授または専任講師 1 名

4. 専門分野：環境社会学または日常生活論
 5. 担当授業科目：現代社会と人間Ⅰ・Ⅱ、社会調査及び実習、社会学セミナーⅠ・Ⅱなどを担当する。
 6. 応募資格：(1) 大学院博士課程単位取得満期退学又はこれと同等以上の研究歴を有する者。
(2) 環境社会学もしくは日常生活論に関して理論的及び実証的な研究に従事している者。
(3) 採用予定日において40歳未満の者。
(4) 専門社会調査士の資格を取得している者が望ましい。
 7. 募集期間：2006年05月20日必着
 8. 着任(採用)時期：2007年04月01日
 9. 応募書類：(1) 選考申請書(写真貼付)
(2) 研究業績書
(3) 著書、研究論文その他の研究業績(主要業績5点)
(4) その他選考委員会が必要と認めたもの
- 付記：所定の書式は、本専攻に直接お申し込みいただくか、下記添付ファイルよりダウンロードしてご使用ください。
<http://www.otsuma.ac.jp/gakuin/> (大妻女子大学)
- ：応募書類の返却を希望する場合は、送付先宛名を明記し返信用切手を貼付した返信用封筒を同封してください。候補者については、必要に応じて面接を行います。
- 書類提出：〒206-8540 東京都多摩市唐木田2-7-1 大妻女子大学人間関係学部長 堀洋道
(簡易書留にて「教員応募書類在中」と朱書きして郵送)
10. 連絡先住所：206-8540 東京都 多摩市唐木田2-7-1
 11. 担当者役職名：大妻女子大学人間関係学部社会学専攻(社会学専攻共同研究室) FAX 042-372-9209

< 2 > 北海道教育大学函館校

1. 講座等名：人間地域科学課程環境科学専攻(生活環境科学分野)
2. 職名及び人員：助教授又は講師 1名
3. 専門分野
学 部：環境経済学又は環境社会学
大学院：環境経済学又は環境社会学
4. 担当予定授業科目
学 部：環境経営学、環境法・環境政策学、生活と安全、生活環境ゼミナール、生活環境科学演習、生活環境科学研究法、情報機器の操作、研究基礎セミナー、専門基礎外国語
大学院：環境経済学特論又は環境社会学特論(予定)、環境経済学特別演習又は環境社会学特別演習(予定)、教育実践研究(予定)、課題研究(予定)
(大学院では当面、社会科教育専修の担当となります)
5. 応募資格：博士の学位を有すること、あるいはそれに準じる業績を有すること
おおむね40歳以下が望ましい
6. 募集期間：2006年06月30日(必着)
7. 着任(採用)時期：2006年10月01日(予定)
8. 提出書類：(1) 著書、学術論文(研究業績書に記載したすべての著書・学術論文・作品等の現物、抜刷又は複写物 各3部
(2) 経歴書(北海道教育大学教員選考規則別記様式第5号) 3部
(3) 研究業績書(同規則別記様式第6号) 3部
(4) 教育上の実績3部(同規則別記様式第7号、職務経験のないものは1の欄に「なし」と記入すること)
(5) 管理運営に関わる貢献3部(同規則別記様式第8号、職務経験のないものは1の欄に「なし」と

記入すること)

- (6)社会的活動に関わる貢献(同規則別記様式第9号) 3部
- (7)学校教育を中心とした教育への深い理解と関心3部(同規則別記様式第10号)
- (8)主要担当予定科目の授業計画(同規則別記様式第11号, 環境経営学, 環境法・環境政策学, 生活と安全について授業計画を提出してください) 3部
- (9)大学院における担当授業科目の概要(同規則別記様式第12号, 専攻・専修欄には教科教育専攻・社会科教育専修と記入し, 環境経済学特論又は環境社会学特論, 環境経済学特別演習又は環境社会学特別演習の概要を提出してください) 3部

※様式をダウンロードできない場合は, 総務・附属学校グループへ問合せ下さい。

9. 提出先: 〒040-8567 北海道函館市八幡町1番2号

北海道教育大学事務局函館校室総務・附属学校グループ電話 0138-44-4204

e-mail soumu@cc.hokkyodai.ac.jp

10. 問合せ先: 〒040-8567 北海道函館市八幡町1番2号 北海道教育大学教育学部函館校

選考委員会委員長 鷹澤 好博 電話・FAX0138-44-4289 e-mail yganzawa@cc.hokkyodai.ac.jp

5 事務局から

新入会員の紹介(2006年2月から2006年3月承認分の入会者5名分 五十音順)

住所など詳細情報につきましては, 次回の会員名簿に掲載いたします。

- (院) 桑原 孝史(くわばら たかし) 東京農工大学農業経済学研究室
- (正) 島上 宗子(しまがみ もとこ) 「いりあい・よりあい・まなびあいネットワーク」
- (正) 竹原 裕子(たけはら ひろこ) 法政大学地域研究センターリサーチアソシエイト
- (院) 田中 淳子(たなか あつこ) The Australian National University
- (正) 山崎 宏(やまざき ひろし) アースビジネスカレッジ

退会者

島守光雄 飯島雷太郎 草深美奈子

『環境社会学会ニュースレター』

第40号(通算45号)

発行日: 2006年5月10日

●
JAES Newsletter

No.40

May.2006

●
編集・発行: 環境社会学会事務局

〒422-8529 静岡市駿河区大谷 836

静岡大学人文学部社会学科平岡義和研究室内

FAX: 054-238-5082 E-mail: jkankyo@ipc.shizuoka.ac.jp

郵便振替口座: 00530-8-4016

口座名: 環境社会学会

<http://www.soc.nii.ac.jp/jses3/>
